旧四郷村役場 築100年迎える

▲旧四郷村役場（四郷郷土資料館） =昨年4月、ドローンで（飯田秀則撮影）

四日市市指定有形文化財（建造物）「旧四日市市役所四郷出張所（四郷村役場）」が、来月でちょうど築一〇〇年を迎える。市は、今秋から耐震補強・修理工事を始める予定にしている。 ＝関連②③④面

旧四郷村役場は、大正十年（一九二一）に地元の実業家、伊藤伝七（十世）が投じた寄附金をもとに建設された村役場で、昭和十八年（一九四三）に四郷村と四日市市が合併した後も四郷出張所として、四郷地区市民センターができる昭和五四年まで使用された。

市民センターの供用後は出張所としての役割を終えるこの建物の取扱いをどうするか、課題となっていた。地域の発展に尽くし、地元の偉人、恩人として尊敬される十世伝七にまつわる建物であり、愛着が深い地元住民による保存の働き掛けは熱心であった。また、四日市市内で失われつつあった近代の建築物としても価値は高く、専門家の要望もあったことから保存が決定し、昭和五七年に市指定文化財となった。

伝七と渋沢栄一の縁 石碑に刻む業績

令和三年のNHK大河ドラマ「青天を衝け」の主人公で、三年後に一万円札の図柄のモデルとなる渋沢栄一は、十世伊藤伝七と深い縁がある。

伝七は、父とともに明治十五年（一八八二）に、川島村に水力を利用した川島紡績所を設立したが、経営は振るわなかった。三重県令（現知事）を介して、渋沢から「規模の拡大が必要。」との指示を受けたが資本金は集まらなかった。すると渋沢から「半分は集めるから、残りは自分たちで」といわれた。その言葉で地元で資金が集まり、浜町（現在の三滝公園）に三重紡績会社を発足させることができた。

▶四郷小学校の近くに建つ石碑

その後、近隣の会社と合併を進め、大正三年（一九一四）には渋沢の仲介で大阪紡績と合併して東洋紡績株式会社を設立し、当時の富田工場は、東洋一の紡績工場と称されるまでになった。

当初は四日市に本社を置き、伝七は副社長に就任、大正五年には二代目社長となった。大正七年に貴族院議員に当選、翌々年に社長を辞した。

伝七は生涯、渋沢の恩を忘れなかったという。地元の墓地に伊藤伝七家の墓があり、その傍らに建てられた石碑には、渋沢による伝七の業績を称える文字が刻まれている。

市指定文化財 旧四郷村役場 整備工事通信

第壱号

令和3年5月30日
(2021)
日曜日

発 行 四日市市教育委員会
社会教育・文化財課
〒510-8601 四日市市諏訪町1番5号
☎ 059-354-8240
syakaibunkazai
@city.yokkaichi.mie.jp
HP 四日市の文化財 で検索

きょうの紙面

■旧四郷村役場 概要と歴史 2
■トピック 設計者を探る 2
■旧四郷村役場 建築物の価値は… 3
■旧四郷村役場 整備のスケジュール 4

旧四郷村役場（四郷郷土資料館）の概要と歴史

正式名称
旧四日市市役所四郷出張所（四郷村役場）

指定分類
市指定有形文化財（建造物）

指定日
昭和五七年（一九八二）二月十六日

所在地
三重県四日市市西日野町三三七五

建築年月
大正十年（一九二一）六月

構造及び形式
木造二階建、三階建塔屋付、瓦葺

面　積
建築面積　三一二㎡
延床面積　六二三㎡

所有者
四日市市（教育委員会所管）

管理者
四郷郷土資料保存会（市から委託）

大正九年（一九二〇）十月
起工。十世伊藤伝七が六万円（現在の二億円から四億円）を寄付する。

大正十年（一九二一）六月
竣工。当時、日本一の村役場と新聞に掲載される。

昭和十八年（一九四三）
四郷村と四日市市が合併、四郷出張所となる。

昭和五四年（一九七九）
四郷地区市民センターがオープンする。

昭和五七年（一九八二）
市指定文化財となる。以後、外壁などの修理、北側に接続していた宿直棟等の撤去、車寄せの復原などが行われる。

昭和五八年（一九八三）十一月
地元市民団体により、四郷郷土資料館として開館する。

令和三年（二〇二一）
築一〇〇年を迎える

勢州毎日新聞　大正13年8月16日

日本一の村役場

伊藤家が三重郡四郷村における革新の先導として一つの築美館ある。（中略）

現在の四郷役場は四郷村の中部西日野の丘に聳ゆる近代式純洋風式の建築で名古屋の建築大家大石清隆氏に建築設計を託し大正九年九月工を起し十年六月納首に監督の大建築物で村役場として最も立派な建築物はおそらく日本全国であろう

丘に聳ゆる近代式純洋風式の建築で名古屋の建築大家大石清隆氏に建築設計を託し大正九年九月工を起し十年六月納首に監督の大建築物で村役場として最も立派な建築物はおそらく日本全国に是を発見することが出来ないであろう

トピック　100年前の設計者は誰？

旧四郷村役場には建設時の「棟札」が残っている。「棟札」とは、建物を守護する札であるとともに、建築時期や建築主、設計者、大工などの関係者を記したもので、建築記録として歴史的建造物では大変重要なものとなる。

旧四郷村役場の棟札には、設計技師として「大石清隆」と記されている。大石清隆は、当時、東洋一の紡績工場といわれた東洋紡績富田工場に所属した「営繕掛（係）」のリーダーとみられる。東洋紡績は、村役場建設に寄附をした伊藤伝七が設立した会社であり、そのつながりによって営繕掛が設計を請け負ったと推測される。

そのメンバーの中に野田新作という技師がいた。村役場建築に関わる用紙に野田の名前が印刷されたものが使われており、野田は、独立後に四郷小学校講堂を設計していることから、村役場の設計に深く関与した人物とみられる。

塔屋を登るらせん階段は、この建物の大きな特徴の一つであるが、野田はその設計にたいへん苦労した、という話が伝わっている。

棟札には「寄附者　伊藤傳七」とともに「設計技師　大石清隆」の名が見られる

旧四郷村役場 建築物としての価値

其の一　塔屋のある役場

塔は、幕末以降、銀行やホテル、学校、役場の洋風建築の屋根にそびえ、文明開化の代名詞のように新しい建物に用いられた。

一方、建物に付属する塔屋は、眺望と地域のシンボルを機能するものであった。竣工当初、四郷村役場の塔屋の屋根はスレート（天然石の薄い板）葺で曲線を描き、特徴ある意匠に仕上げられていた。塔屋として独立する棟を持つ役場はたいへん珍しい。

其の二　外観の構成

外観の仕上げが、下からモルタル洗い出し、横板張り、縦横に区画した漆喰塗りの三層になっている。二階以上では、付け柱や付け梁を装飾用として演出するスティックスタイルを用いて、壁面をリズミカルに分節し、上げ下げ窓が等間隔に配置されている。

車寄せの玄関を中心として左右対称となる主屋と、主屋袖棟の端にそびえる三階建ての塔屋がバランスを保つ。

～「擬洋風」の館～

旧四郷村役場は、和洋折衷の建物で「擬洋風」と呼ばれる。瓦や漆喰、和小屋組を用いる和式と、洋風装飾の外観やトラス、カウンターによる受付などの洋式と両方が適材適所でみられる。明治以降、採用されてきた洋式の技術を巧みに取り入れながら、伝統工法と融合した建築物といえる。

其の三　和と洋の小屋組

天井裏の構造に、和小屋組と洋小屋組の二種類が使われている。和小屋組は、古来の伝統的な工法で、梁（横材）に束（縦材）を立てて屋根を支える。水平荷重に限界があるため、小さな部屋が田の字状に配置されている主屋棟の屋根に用いられている。

洋小屋組（トラス）は、部材を三角形状に組み合わせる合掌により上に働く力で梁を持ち上げるため、大きな空間をつくることができる。主屋袖棟の議場の広さは、このトラスによって成り立っている。

其の四　アールデコ調

アールデコとは、一九一〇年代から三〇年代にかけてパリを中心に西欧で栄えた装飾様式で、それまでの絢爛豪華な彫刻等に代わって幾何学的な模様をモチーフにした。

旧四郷村役場では、議場の天井や階段の手すりの柱、車寄せなどにみられ、当時の最先端の様式を取り入れていたことが分かる。

其の五　上げ下げ窓

明治から大正の建物によくみられる、上下に開閉する窓。窓袖柱の中に分銅があり、紐でつながった窓と重さが釣り合うことで、留め金を使わなくとも自在に止まる。

其の六　リノリウム

麻布に亜麻仁油などの植物性の油を塗って作られた内装材。国会議事堂など、貴賓室があるような施設に敷かれた。

当時のものが現存していることは珍しく、貴重。旧四郷村役場のものは、階段上面は擦れて失われたが、その後じゅうたんを敷いたことによって側面の部分が残った。卍形の模様は手描きである。

其の七　擬石塗の円柱

設計図には書かれていない、旧事務室に立つ二本の洋風の円柱には、大理石に模して左官が墨汁で描いた擬石塗が残り、たいへん貴重。

耐震補強・修理工事は令和4年度まで

旧四郷村役場（四郷郷土資料館）は、今年秋頃から耐震補強・修理工事が着手され、最長で令和５年３月までかかる見通し。産業都市四日市の発展を伝える文化遺産として保存を図る。資料館は７月から休館し、工事に向けた準備に入る。リニューアルオープンは、令和５年夏頃を目指す。

7月から休館へ

旧四郷村役場は、大正十年（一九二一）の建築以来、抜本的な耐震補強は施されておらず、ちょうど一〇〇年を迎える。

その間にさまざまな修理が行われてきた記録、あるいは痕跡はみられるが、構造躯体をなす木材はほとんど百年前のままである。

平成二六年（二〇一四）に、外壁の塗装修理で表面の化粧板を剥がした際、柱の腐朽がみられる箇所があった。平成二三年に起きた東日本大震災など、近年の大地震に対する危機感もあり、対処する必要性が高まってきていた。

平成二八年、耐震診断を行い、「震度六～七の地震で倒壊する可能性が高い」と判定されたことが決定打となった。

旧四郷村役場は指定文化財であり、本来、その状態を保存することが基本となる。そのため、あらためて建造物としての文化財の価値を明文化し、どのように修理することで価値が保たれ、かつ、工事後の活用にも効果をもたらすことができるか、平成二九年度から三十年度にかけて、歴史的建造物や建築構造の専門家らで委員会を立ち上げ、議論を重ねた。また、並行して、耐震補強・修理工事の基本設計の作成を進めた。

設計作成にあたり他事例を参考とすると、高額な工事費になることが分かってきたため、平成二二（令和二）年度は、旧四郷村役場の文化財的価値や工事後の活用をPRし、工事に対する市民の理解を促進する事業を展開した。

令和二年度は、工事の実施設計を作成するとともに、リニューアル後の展示構想を、四郷郷土資料保存会と協力して検討した。

新しい展示では、二階へも拡張して現在の展示を引き継ぎつつ、役場建築としての一部復原や、四郷を発祥として産業都市四日市が発展した歴史を伝える展示など、市の近代産業発展にもスポットをあてる予定となっている。

リニューアルオープンへのスケジュール

令和３年	６月	ホームページで築100年をPR
	７月	休館開始、展示資料整理
	９月	展示資料一時搬出
	１０月	工事開始予定 （工事中の現場見学開催予定）
令和５年	３月	工事完了見込み

夏以降　リニューアルオープン

◎旧四郷村役場（四郷郷土資料館）へは・・

駐車場に限りがあるため
公共交通機関をご利用ください

四日市あすなろう鉄道
あすなろう四日市駅より八王子線
終点「西日野駅」下車　徒歩 15分

三交バス
近鉄四日市駅南乗り場より
高花平、小山田病院、宮妻口、椿大神社行き
「四郷小学校前」下車　徒歩１分
（四日市駅より 15分）

資料館は、６月中は土曜日に開館します。
７月から休館しますので、中には入れません。
工事中は、駐車場や屋外トイレも使えません。

編集後記

いよいよ旧四郷村役場（四郷郷土資料館）の耐震補強・修理工事が今年度から開始されます。ちょうど築一〇〇年を迎えた直後にあたり、関係者の皆様には申し訳ありませんが、二年後のリニューアルオープンを心待ちにしていただきたく、お願い申し上げます。楽しんでいただける展示内容を考えてまいります。

次号では、具体的な工事の内容や、その後の活用についてお伝えしたいと思います。

（か）